

報告 3◎

『いざなぎ流の研究』を書き終えて

小松和彦 国際日本文化研究センター所長

先ほど山本さんが紹介されましたように、私は昨年『いざなぎ流の研究』という本を出しました。副題は「歴史のなかのいざなぎ流太夫」といいます。私は主としていざなぎ流の祭文の研究をやってきました。祭文というのは逃げていきません。太夫さんが所持していたり、あるいはもうすでに亡くなった太夫さんであっても、書き残したものや備忘録みたいなものがあちこち残っているので、それを写真に撮ったりしておけば、私が暇なときにそれをテキストに起こして研究することができます。その祭文は文学などの観点からも比較しながら研究してきました。

そういう研究をしながらたいへん危機意識を持ったのは、太夫さんたちが持っている記録がどんどん消えていってしまうことです。祭文を書き記した帳面みたいなものを、研究をあとにしても、まずは今のうちにできるだけ記録に残しておきたい、どこかに集めておきたいと考えました。個人的にもずいぶん写真を撮ったりしてきました。そういうことをやりながら、私を悩ませはじめた疑問は、このいざなぎ流とはいつ頃からこの土地に伝承されるようになったのだろうか。今のこの太夫の師匠は誰で、その前の師匠は誰で、とずっとたどっていくと、現在に伝わっているような知識を持った太夫さんたちはいつ頃までさかのぼれるのだろうか、という疑問です。言い換えてみれば、いざなぎ流の太夫の先祖をできるだけ実証的に、文書を探しながら復元したいということです。まったくの想像をめぐらしてなら、平安時代だ、いやそれ以前だというようなことを、あれこれ断片的な文言を頼りに想像することはできるのです。なぜかというのは、梅野^{ヘカシヨ}さんに批判を加えたことがあるのですが、たとえば博士です。博士は明らかに先祖でありますけれども、博士がお米を使っている。その前は巫女だったといいましたけども、では、いざなぎ流の太夫が博士の前に本当に女だったのかどうか。これは歴史的事実として、物部なり横山なりで探せますかと言った場合に、歴史的事実を探すことは非常に難しいのです。だったら、同時に物部以外のところですでに男の太夫にかわってもよかったかもしれないと、ある意味では想像をめぐら

すこともできますけれども、実証的にはできない。これはものすごくいらだつことです。たとえばいざなぎ流の先祖は博士だというふうな説がある。じゃあ、本当にたどっていくと博士に行きつくんだろうか。いやいや、いざなぎ流の太夫というのは陰陽師だという。そうしたら、本当にこの地で彼らは陰陽師という名を名乗り、そして公的にそれが認められていたんだろうか。そういう証拠はあるだろうか。あるいは、お祭りをやっているのは神職だとも言われます。古い書物の中には、神楽をやっているそういう信者なんかでお祭りをやっていた。あるいは、大庄屋のところで、お祭りをやっていたとか、そういう記録があるのです。では、そういうお祭りをしていたのは神職だったのか、あるいは陰陽師だったのか、博士だったのかということを、実証的に調べなければいけません。

民俗学がしばしば歴史学から批判されるのは、「大昔だ」とか、「全体だ」とかと言って、わけのわからない抽象的な過去の中に時を設定して、「かつて、いざなぎ流の太夫の先祖は巫女だった」などと言ってしまうことです。それはやっぱりまずいのではないだろうか。できるだけ実証的な形で、この物部の土地に位置付けながら、資料をしっかりと出しながらたどってみる必要があるのではないかということを思ったのです。ただし、そうは言っても、史料がなければ論じることができません。

この20年ぐらいでしょうか。とりわけここ10年の間は、とにかくちょっとでも「かつて先祖が博士だったらいい」とか、「陰陽師だったらいい」と言うのを聞きますと、そこに残っている文書を見せてもらっています。幸いなことに、かなりの史料が出てきましたので、やっとその辺の歴史的なプロセスをたどることができるようになってまいりました。

現在は、いざなぎ流の太夫たちというのはいくつかの系統に分かれます。太夫さんの間でも実際にそうです。祈禱が得意な太夫と、神祭祀が得意な太夫さん。自分の師匠が神祭祀が非常にうまかったとかいうような太夫さんがいるんですね。

それをたどっていくと、近世の土佐藩あるいは幕府の宗教政策の中で制度化されていた、そういう中で、いざなぎ流の現在伝わっている知識を持っていた人たちが浮かび上がってきました。

それは江戸時代が終わり明治になって、新しい宗教政策の中で解体されたり、再編されたりすることになります。江戸時代には、神社に奉仕する神職、あるいはその周りにいて手伝いをする社人といわれるような人たちによって、神社のお祭りがおこなわれます。それは今現在も続き、お祭りの形式のほとんども江戸時代のやり方を見ても違いありません。

もう一つ、先ほども出てきました弓祈禱の系統。いざなぎ流の太夫たちは現在はいませんが、私が土佐に入った頃は、「そういうことを知っている」とか「できる」と言う太夫さんがおられました。「しかし、やったことはない」とのことでした。弓をたたいて託宣をするので、これは博士の流れなんですね。神楽だけ

れども、基本的には姿を見せない。違うところで弓祈禱をやっています。でも、その博士の中に、米の占いと弓祈禱を基本的な職能として、土佐藩から許された人たちがあったのです。

もう一つが陰陽師です。これは土御門家の許可をもらって、ある意味で免許証をもらう必要があります。これは大体、筮竹を使ったりというような形の占いをするので、彼らは神祭りも弓祈禱も米占いもしてはいけません。

こういう形で諸派が分かれながら、その周りには弟子筋の人たちがいて、ときには手伝いに寄ったりというふうにならおこなっていました。

でも、まだよくわからないのは、本当に神職たちの信仰知識はお祭りだけだったんだろうか。ひょっとしたら、博士がおこなったような知識も、実は習得してやっていたかもしれません。あるいは、陰陽師という免許を持っているけども、博士で弓祈禱をやったりする。米占いをしたり、ときには神祭りもやっていたかもしれないという、そういう可能性もあります。

物部における公認の宗教制度の中で言えば、だいたい近世の終わりぐらいから、世襲の神職たちは吉田家の免許を持ち、あるいはちょっと遅れてから土御門家の陰陽師の許可をもらったような宗教者たちが活動しています。

でも、いざなぎ流の知識は、いったい彼らがどの程度関知しているだろうか。その中身はまだわからないのです。現在「いざなぎ流」とくくられている、彼らの伝えてきた信仰知識。祭文とか、法文とか、それがどのような流れの中にあって、どの程度、歴史的にさかのぼれて、中央の文化圏の流れをどのように継承しているのか、こういうことはまだよくわかっていません。私自身は今までまだつきとめておりません。

私の頭の中でいざなぎ流というのは、ほあんとした中にいるみたいな、空中にるように思っていたのですけれども、そうではなくて、物部の地に足をしっかりおろした形で見るできるようになってきました。写真を撮った祭文とか法文の書物は逃げませんので、それらの分析をしっかりとやっていきたいと思っています。これから、祭文とか儀礼について私なりの資料の提示と分析をしていきたいと考えております。

[こまつ かずひこ]